企業から見たインターンシップ

パナソニック株式会社

今年もサマーインターンシップの時期が間近に迫ってきた。参加を検討している読者も少なくないかもしれないが、一口にインターンシップといっても参加する企業によってプログラム内容は多岐にわたる。数日間で座学中心のものもあれば、数週間にわたって実際の職場で業務体験できるものまで、千差万別だ。どのインターンシップを選ぶかは、参加の目的や日程の都合によって異なってくるだろうが、“仕事理解”というインターンシップ本来の目的を達したいのであれば、実際の職場に入り込める長期インターンシップがお勧めといえるだろう。そんな実践型のインターンシップを例年100種類以上実施しているのがパナソニックだ。同社の担当者にそのプログラム内容や参加のメリットを聞いた。

本当の意味での就業体験ができる実践型のインターンシップ

『ものをつくる前に人をつくる』の精神から、日本でいち早くインターンシップを導入

そもそもインターンシップは1990年代初頭にアメリカで生まれた教育プログラムだ。

日本でも1997年から政府が旗振り役となってインターンシップの普及を推進したが、その1997年に日本でいち早くインターンシップを採用・実施したのがパナソニック（当時の松下電器産業）だった。

「パナソニックに息づいているのは『ものをつくる前に人をつくる』という精神です。だからこそ、当社は日本で先駆けて産学協同の人材育成を目的としたインターンシップを実施することにしたのです」とパナソニック グループ採用センターの畠山慧子氏は話す。

「パナソニックがインターンシップのポリシーとして掲げているのは、〝産学協同の人材育成〟〝就業体験を通じた気付きの場の提供〟〝就業適性の確認を通じた就職のミスマッチ解消〟の3点。

参加する学生には就業体験という〝気付きの場〟を提供することで、将来について考えるための機会としてぜひ活用してほしいですね」

（畠山氏　以下同）

学生にとって「自分がどういった仕事（会社）に向いているのか」「本当に興味を持てるものは何なのか」といったことに〝気付く〟ための機会としてインターンシップはまたとないチャンスといえるだろう。では、パナソニックでは実際にどのようなプログラムが実施されているのだろうか。

本当の意味での就業体験が可能

例年、パナソニックのインターンシップは100種類以上のコースを用意しており、全国各地の拠点で技術系職種を中心に幅広い職種のプログラムを実施している。

昨年からは、営業・マーケティングや人事といったいわゆる文系職種のプログラムも実施しており、より多様な選択肢から自分に合ったインターンシップを選択できるようになった。また、同社では学部2年生からインターンシップに参加できるようになっており、多様な学生を幅広く受け入れている。

同社のインターンシップの特徴は何と

いっても、徹底した〝現場主義〟であること。数週間にわたって実際の職場に入り込み、社員と机を並べて働くことで、ありのままの〝仕事現場〟を体感できるのが魅力といえるだろう。

「当社のインターンシップはOJT（※注）制を採用しており、言葉通り〝社員と肩を並べて〟働いてもらいます。

実際には、まず事業概要などについてのオリエンテーションを受けていただき、その後それぞれの現場（プロジェクト）に配属となります。配属される部門によって仕事の内容は異なりますが、参加者には各自の目標が設定され、達成を目指して業務に取り組んでもらいます」

場合によっては社員とともに会議に出席したり、出張に同行したりすることもあるという。まさに日々の業務をありのままに体験できるインターンシップとなっている。

毎年様々なサマーインターンシップが開催されているが、実際の職場に入り込んで社員とともに長期間働くことができるプログラムは多くはない。それゆえ、パナソニックのインターンシップに参加した学生の満足度は例年非常に高いという。また、新卒入社者の中でインターンシップに参加したことのある社員は、入社前に職業への理解、適性がより分かっている分、入社前と後でギャップに感じることがほぼないのだとか。実際に企業に入社してからミスマッチを感じても進路変更をするのは容易ではない。それならばインターンシップを活用し、職場体験を通じて今の時期から仕事に対する価値観のすり合わせをしておくのもいいかもしれない。

※注：OJT（オンザジョブトレーニング）とは、実際の仕事を通じて業務に必要な技術、能力、知識などを指導し、習得させる教育手法のこと。

●Professional Internship Program
2011年度の募集コース例

基礎応用研究／開発研究	計114コース
設計開発	
生産プロセス技術	
SE／SI	
知的財産	
グローバル調達	
人事	
営業・マーケティング等	

実践型だからこそ問われる本人の主体性

ありのままの仕事を体験できる実践型のインターンシッププログラム。それは多くのことを学べる機会であることは確かだが、参加者の目的意識や自主性が低ければ、得られるものも少なくなるという場合もあるだろう。

畠山氏も「インターンシップ参加期間にどのようなことを学び、何を得るのか？それは参加者の意識レベルで全く異なってくるでしょう。大事なことは自主的に取り組むこと。是非、自分自身の目標を定めた上で参加してほしいですね」と話す。

実践型インターンシップへの参加を考えている方は、漠然とでも「自分がどうなりたいのか」、「インターンシップを通じて何を学びたいのか」といったことを事前に考えることをお勧めする。そうすれば、参加期間中に「どのように行動すべきか」が明確になるだろう。

目的を明確にし、主体的に行動することで、実践型のインターンシップにおける経験はより価値のあるものとなるはずだ。

理系学生へのメッセージ

現在、急激なグローバル化が進み、私達の周りの環境は日々変化していっています。これからの時代、何が起こるのかハッキリとは誰にも分かりません。

そんな時代だからこそ、皆さんには是非、「自分はどういう人になりたいのか、どういった仕事をして生きていきたいのか」など、自分の将来について真剣に考えてほしいと思います。

そのためにも、是非、当社のインターンシップで〝働く〟ということを体験してみませんか？

当社には、確かな技術力と高い志をもった社員が大勢います。きっと参加するメリットは大きいと思いますよ。多くの皆さんからのご応募、お待ちしています!!

パナソニック株式会社　グループ採用センター
新卒・キャリア採用チーム
畠山 慧子（はたけやま・さとこ）

企業から見たインターンシップ

UBS証券株式会社

メーカーやITといった理系学生にとって身近な業界に関心を持っている方も多いかもしれないが、サマーインターンシップはせっかくの機会。何となく興味を持っていたが、接点が少なかった業界のインターンシップに参加してみるのも面白い。例えば金融業界は、理系出身者が数多く活躍しており、理系学生にとっても注目が高まっている業界の一つだ。金融業界がなぜ理系を求めているのか、そして理系学生が金融業界のインターンシップに参加する意義について、UBS証券の事例を通じて考えてみよう。

インターンシップを通じて感じる
“金融業界でも理系が活躍できる”という確信

金融は、理系の強みを発揮できる仕事。「必要なのは経験と前向きな気持ち」

「インターンシップは学生の皆さんと企業がお互いを知り合う重要な機会。私たちとしては、採用活動の重要なステップとして考えています。理系学生の皆さんにとって、金融業界、特に投資銀行の仕事については、話を聞くだけでは理解しづらいと思います。その点でインターンシップは、どういう業務をしているか、どういう社員が働いているかを知っていただくのに最適な機会です」と話すのはUBS証券株式会社 投資銀行本部の浜井稔氏だ。

多くの理系学生にとって、金融業界は普段の生活からは縁遠い世界。「敷居が高い」という印象を持っているかもしれない。だが浜井氏によると、浜井氏も含めてUBS証券社員の半数ほどが理系出身。大学院を修了して入ってくる社員も多く、中には博士課程修了者もいるという。

「『投資銀行』『ファイナンス』『M&A』――。聞き慣れない専門用語を耳にすると、難しいと感じてしまう人が多いのではないでしょうか。でも実際にやっている業務に注目すると、特別なことをやっているわけではありません。例えば財務分析等のExcelを使った業務もあり、実務的には普段の研究室でやっていることと近い部分もあるのではないでしょうか。

ですから、インターンシップに参加して業務を体験してもらうことで、『経験・知識を積んでいけば将来的にやっていけるな』と感じてもらえるのではないかと思います。金融の仕事に欠かせない〝数字〟についてはもちろん理系の強みですが、ロジカルに説明・議論できる能力も理系が得意とするところ。金融は理系の強みを発揮できる仕事なのです」

（浜井氏　以下同）

社員が普段考えていることが分かる業務体験インターンシップ

理系学生にも金融の仕事を理解してもらえるように、UBS証券は例年、数日間のインターンシップを実施している。

UBS証券の投資銀行本部では、まず業界や業務内容について説明した後、グループワークに参加してもらう。例えば昨年のテーマは「M&A」。企業価値の評価方法について基本的な考え方を学んでもらってから、「どんな会社を買収するべきか」を分析。最後に話し合った内容についてプレゼンテーションするという流れだった。

「基本的な分析からお客様への提案までの一連の流れを体験してもらいました。

日々どういうところに着眼し、お客様にどういう提案をして納得していただいているのか。商談を成立させるためにどんなところに注意しているのか。簡易化した流れの中で、われわれが普段から考えていることや、分析のポイントを学んでいただけるように気を配っています。

座学としてのインターンシップではなく、実際の仕事に近い体験をしてもらおうと考えています。学生の皆さんにとって参考になるプログラムになっているはずです」

社員の人柄や会社のカラーが分かることもインターンシップの魅力

インターンシップの魅力としては、業務内容について深く学べることのほかに、社員と直に触れ合えて、会社の雰囲気を体感できることも挙げられる。

「インターンシップに参加したことをきっかけに、UBS証券への入社を決める社員が毎年数多くいます。そうした社員に『どこに惹かれて入社を決めたのか』と聞くと『社員の人柄』『チームワークの良さ』『風通しの良さ』が挙げられることが多いです」

就職活動の際も、会社説明会や面接選考、人事担当者とのやり取りなどから、社員の人柄や企業の雰囲気を感じ取ることはできる。だが、インターンシップなら実際に企業の中に入ることができる。そうして働く環境を肌で感じられるのは大きな魅力といえるだろう。

「会社のカラーは、結局は働いている社員一人ひとりが醸し出しているもので決まってきます。もちろん個々の社員はそれぞれ個性を持っていますが、自然と会社ごとの社風が生まれてきます。UBS証券は外資系企業としてのグローバルな発想・風通しの良さなどを持ちつつ、チームワークを重んじる雰囲気・仕事に対する考え方等に日本的な良さが色濃く残っているように感じます。そうした会社ごとのカラーもインターンシップで感じてほしいですね」

会社の名前以上に、誰から学ぶかが大事。ぜひインターンシップで社員を知ろう

投資銀行本部の仕事は、時には、社長やCFOなどの役員や部長クラスを相手にすることもある。会社を動かす人の目線で物事を考えながら仕事ができることにやりがいを感じているという浜井氏。大手総合家電メーカー間の事業再編を裏から支え、新聞の一面を飾った時には何事にも変えられない達成感・充実感を味わったのだとか。

一方、M&Aや資金調達などの大型のプロジェクトは1人でできる仕事ではない。常にチームワークが求められるところも投資銀行業務の面白さだと浜井氏は言う。1人で突き詰めて考えていく仕事よりも、チームで一緒に働く仕事に興味があるのなら、投資銀行の仕事に向いているかもしれないと分析している。

浜井氏自身も理系出身。だからこそ理系学生の後輩に向けて「『理系の強み』があることに自信を持って『理系だから』と物怖じしたりせず、固定概念に縛られずインターンシップ先を選んでほしい」と話し、会社選びについて次のように助言してくれている。

「これから社会人のキャリアを始める皆さんには、どのような環境で基本的な業務を学ぶのか、しっかりと考えてほしい。最初の2〜3年は、先輩社員の下で仕事を学んで吸収していく時期になるでしょう。その時期に、どんな先輩社員から学ぶかで、その後の成長スピードは変わってくるはずです。会社の名前以上に、どのような先輩社員から学べる場かが大事だと思っています。その点、UBS証券にはチームワークのある社員がそろっていますし、個々人の能力も高い。入社した後、どれだけ優れた上司の下で学べるのか、ぜひインターンシップに参加して知っていただきたいです」

理系学生へのメッセージ

外資系金融機関は目指す人にとってそれなりの狭き門ですが、その分、入ってからは業務内容自体への興味が尽きない仕事です。

日々のお客様とのやり取りは真剣勝負の連続でプレッシャーもありますが、そのような機会を楽しんでいる面もあります。実際のディール実務に加え、業界動向の分析や、個々の担当企業への提案内容の推敲など、やるべき事にきりはありませんが、知的好奇心をすごく刺激される仕事だと思います。その意味では、投資銀行の仕事は、好奇心・探究心の強い方に向いていると思います。

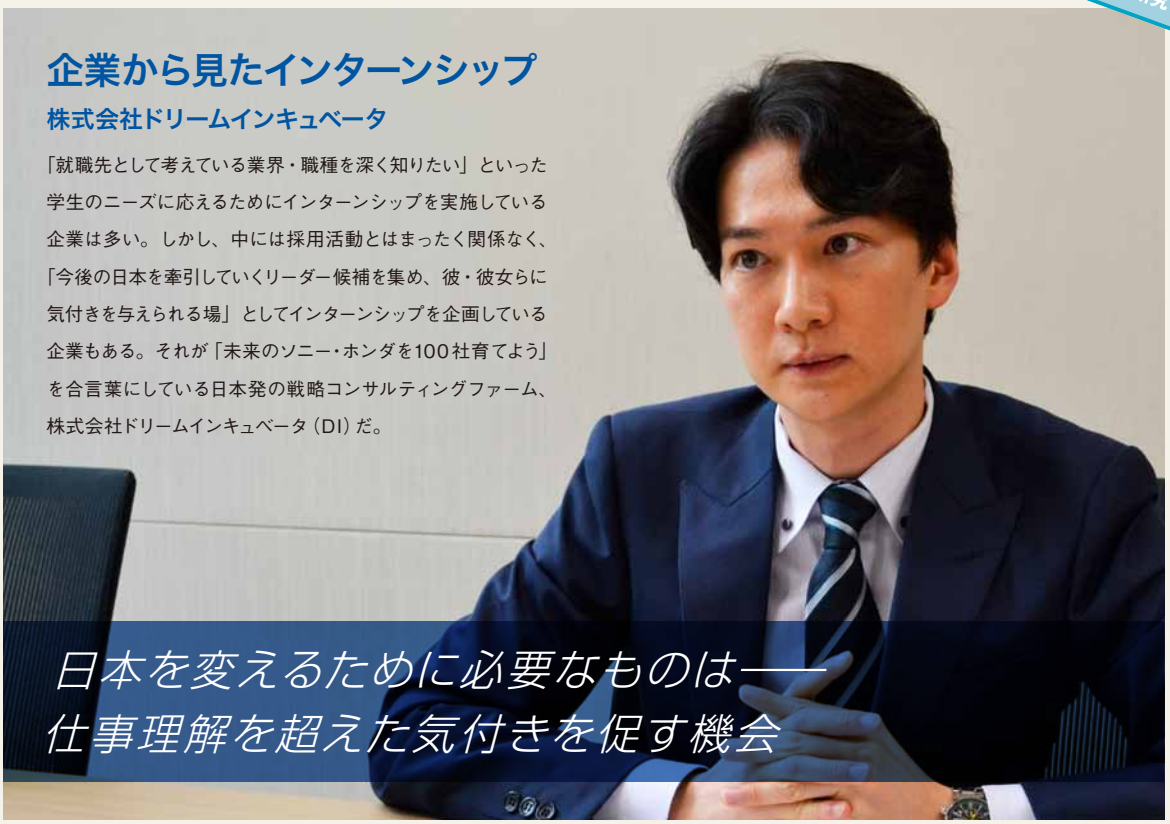
多様な業界がありますから、理系学生の皆さんは、ぜひ色々なインターンシップを経験してほしいと思います。その中から最終的にベストと思える選択ができればいいのではないでしょうか。金融の仕事に多少なりとも関心を持っているのなら、ぜひ金融業界でのインターンシップも選択肢の一つとして検討してほしいですね。

UBS証券株式会社　投資銀行本部
エグゼクティブ ディレクター
浜井 稔（はまい・みのる）

企業から見たインターンシップ

株式会社ドリームインキュベータ

「就職先として考えている業界・職種を深く知りたい」といった学生のニーズに応えるためにインターンシップを実施している企業は多い。しかし、中には採用活動とはまったく関係なく、「今後の日本を牽引していくリーダー候補を集め、彼・彼女らに気付きを与えられる場」としてインターンシップを企画している企業もある。それが「未来のソニー・ホンダを100社育てよう」を合言葉にしている日本発の戦略コンサルティングファーム、株式会社ドリームインキュベータ（DI）だ。



日本を変えるために必要なものは――仕事理解を超えた気付きを促す機会

日本を強くするため、企業にできることは。今後の日本を牽引する学生に気付きを与えたい

「日本には閉塞感が漂っています。国家として、アジアのリーダーになるためのビジョンを掲げていくべきだと私たちは考えていますが、『そのためにこうすればいい』と情報発信しても、なかなか本質のところまで伝えきれないとも感じています。なぜなら経営は学問として学ぶものではなく、実践の中で身に付けるものだからです。

ですから、たった2日間ではありますが、DIではインターンシップを通じて学生に当事者として自分で答えを考えてもらう実践の場を提供しています。今の日本に必要なのは『最初から自分で答えを出すんだ』という人材。私たちはあくまでサポーターであって、スキルや心構えのあり方について伝えられるものがあれば伝えていくという姿勢です」と同社マネジャーの井上和久氏は話す。

国家が進むべき道を指し示すのは本来、政治家や官僚の役目だが、数多くの問題が山積する昨今では企業自身にも主体的な行動からのアプローチが求められている。「日本を強くするためには、企業からどのようなアプローチが取れるのか」そんな問題意識を持って働いているDIの社員に触れてもらうことで、今後の日本を牽引する学生に気付きを与えられる場にしたいと同社は考えている。

国策まで考慮に入れ、成長産業のトップ企業を題材に経営戦略を考える

DIのインターンシップでは、2日間のプログラムの中で新規事業や成長戦略を立案するケーススタディに取り組んでもらう。題材として扱われるのは、環境エネルギーやインターネットなど、今後の成長が見込まれる産業が多い。各業界を代表するリーディングカンパニーを題材に考えることになる。

「当社のインターンの特徴の一つとして、国策についても考えてもらいます。例えば太陽電池がテーマだとすると、国によっては太陽電池の導入に手厚い補助金を用意しています。企業レベルの努力には限界があり、どうしても戦略変数として国策が影響してきますから、『国家としてどう動くべきか』と考えることが外せないのです」

（井上氏　以下同）

厳選されて集まった学生30人のつながりは社会に出てからも残る

DIのサマーインターンシップ募集人数は30人程度。基本的にDIとしてインターンシップから直接採用する意図はないため、コンサルティング会社を志望する学生以外にも幅広く門戸を開いている。多数の応募がある中でとにかく優秀な人材を選りすぐっているため、将来的にその年代を代表することになりそうなトップ30人が集まることになるという。

「参加した学生の感想として目立つのは、『こんなに優秀な学生がいたんだ』というものです。ほかの大学・学部にはこんな人がいたんだと気付き、インターン終了後も『DIのインターン仲間で集まろう』と呼び掛けて、そのまま横のつながりが生まれ、社会に出てからも残っているようです。

外資系のコンサルファームや外資銀行、商社、メーカー、官公庁、進学など、進路はさまざまですが、DIのインターンに参加してくれた学生の就職先はどこも一流の企業です。数年後に近況を聞いても一線で活躍している人ばかりですので、日本の産業を強くしたいと考えている当社にとっても有益な場になっていると感じています」

「日本の産業をリードする」と本気で考える社員の志の高さから大きな刺激

参加学生の声として、もう一つ特筆すべきなのは「社員の志に刺激を受けた」というもの。「日本の産業をリードしていくんだ」と本気で考えているDI社員の志から受ける刺激は学生にとって非常に大きいようだ。

取材に協力いただいた井上氏自身は、DIの新卒入社第一号。宝石商の家庭に生まれ、バブル期に店舗数を急拡大する中で幼年期を過ごしたが、小学校高学年のころにバブルが崩壊。市場規模が3分の1にも縮小し、実家の事業も上手く回らなくなり、「自分の今後の生活は、そして日本の将来はどうなるんだ」と常に問題意識を抱えながら育ってきたという。

DIで働いている社員は、多かれ少なかれ同じような問題意識を抱いて入社してきている。直接採用が目的ではないとはいえ、サマーインターンシップに参加し、結果的に同社に入社している学生もいる。そんな学生は間違いなく志を共有できる人材だと井上氏は語っている。

「四苦八苦」のうち、四つの苦はコントロール可能。一緒に働きたい人とやりたい仕事をしてほしい

就職活動に臨むに当たり、学生に知っておいてほしいこととして「四苦八苦」を挙げる井上氏。四苦とは生・老・病・死のことだが、残る愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦の四つの苦について意識してほしいと語っている。

「残り四つの苦を解釈し直すと、会いたい人に会えない苦しみ、会いたくない人に会ってしまう苦しみ、やりたいことをやれない苦しみ、やりたくないことをやる苦しみ、となります。生・老・病・死は避けられませんが、残る四つの苦はコントロールできることなのです。

就職活動をしている学生の中には『どこの会社に入ればいいか』『どんな仕事をすればいいか』と迷っている方がたくさんいますが、そんな学生には必ず四苦八苦について話すようにしています。シンプルなことなんだと。一緒に働きたい人とやりたいことをやれば、コントロールできる部分は幸せになるんだと。

DIがサマーインターンシップで多様な学生を集めている理由の一つもそれです。自分が一緒に働きたい仲間、やりたいことに気付いてもらう場になってほしいと願っています」

理系学生へのメッセージ

理系学生の中には、「モノづくりを仕事にしたい」という方が多いかもしれません。そんな方々にも、DIのインターンを体験してほしいですね。

実際、「モノづくりの仕事をしたい」「エンジニアになるんだ」と考えていた学生の中から、DIのプログラムを体験することで「エンジニアが輝けるインフラを作る方が活躍できるのでは」と考えを改め、コンサルティング業界に飛び込む人もいます。

モノづくりについて学んできた知識・経験はコンサルティング業界でも活かせますから、モノづくりや研究開発に興味を持っている学生さんも、ぜひDIのインターンに挑戦してみてください。

株式会社ドリームインキュベータ
マネジャー
井上 和久（いのうえ・かずひさ）